

シナリオB

インスパイア

ふと、「シナリオB」という言葉が脳裏をよぎった。この間、たまたま見かけた「プランB」（環境問題研究家のレスター・ブラウン著）という本のタイトルに、インスパイアされたのかもしれない。



それは、仕事帰りの道中で、連日取り立たされている「イスラム国」問題について考えながら、歩いているときの事だった。

はじめてこの報道を目にしたのは、会社の慰安旅行の朝だ。旅先でTVを点けると、どの局もイスラム国問題で持ちきりだ。なぜかそのとき強い違和感を感じ、内容も見ないままTVのスイッチを切った。その感覚は、邦人二人が殺害され、最悪のケースとなってしまった今もお、胸の奥に付きまとっている。

違和感の理由

それは、この問題を契機に、日本の軍国化が進み、戦争へと大きく舵を切ってしまうのではないかという危惧からかもしれない。事実、北海道新聞によると「2月3日の参院予算委員会で首相は、邦人人質事件に絡み、自衛隊任務の拡大を視野に入れた憲法9条改正に意欲を示している」と報じられている。TVやマスコミの論調も、概ねイスラム国の脅威に対し、国としての

何らかの手立てが必要と、まるですでに憲法改正や自衛隊派遣を容認しているかのようだ。憲法にこだわるわけではないが、何かシナリオ通りに事が進んでいるような、嫌な感じが付きまとう。それは、もう20年以上も前から言われていて最近ネット上でも話題になっている、いわゆる「陰謀論」が、頭の隅をかすめるからかもしれない。

秘密結社の陰謀？

「陰謀論」とは、簡単に言えば、わずか数%の超富裕層が影の政府を形成し、世界を動かしているというものだ。最近ではTVのバラエティー番組でも「信じるか信じないかはあなた次第です・・・」などど、フリーメイソンやイルミナティーなどの秘密結社を特集するようになったので、耳にした方もあるだろう。「陰謀論」



によれば、彼ら影の政府は、ゆくゆくは人類削減計画にのっとって優良な白人人種の一部だけを残し、多くは未知の病原菌によるパンデミックや、世界戦争等によって人口削減しようとしているらしい。戦争は、彼らが作ったその計画実現と、資源の略奪、そして兵器産業の在庫処分のために、自作自演で起こしているとさえ言われている。

この世界で平穏に暮すわれわれには到底信じられない話だ。まあ、「とんでも話」として片付けられる類の話ではあるが、昨今では世界銀行の元職員など肩書きのある人々からの内部告発もあるようで、あながち妄想とも言い切れない。もし、それが真実だとしたら、すでにそのシナリオどおりに事が運んでいるとも言えなくはない。

戦争は最大の自然破壊

ことさらに不安を煽るつもりは無いが、私達がこのまま世界の流れにただ流されてしまっていては、後の祭りにもなりかねない。今、もし世界戦争など起きてしまったなら、当然の流れで日本も巻き込まれ、地球環境に大きなダメージを与えて人類淘汰の憂き目に合うことだって考えられる。「戦争が最大の自然破壊だ」と、かつてアンナプルナ農園の正木さんが言っていたが、杞憂であることを祈るばかりだ。



負の連鎖

そんなことを考えていたものだから、きっと「シナリオB」などという言葉が浮かんだのだろう。憎しみには憎しみで、力にはそれを上回るより大きな力で対抗する、その負の連鎖では、真の問題解決にはなりえないだろう。爆弾で問題を解決することはできない。それは状況を悪化させ解決を困難にするだけだ。なぜならイスラム国は、かつてアメリカを始めとする西側諸国が空爆した、イラクやアフガンのアルカイダが前身なのだから。

善悪という幻想

本来この世に悪などない。また同じように善や正義もない。それは、一方の価値観から見たレッテルであり、相手からすればこちら側が悪魔に見えることだろう。

けっして彼らを擁護しているわけではない。テロリズムは許さざるべき行為である。だからといってまた空爆が許されるとは思えない。今回のような悲劇があってもなお、怒りに振り回されることなく、冷静さを保つ多くの日本人の、魂の高潔さに救われる思いだ。

では、いったいどうすればよいと言うのだろうか。

自然療法からの教え

ふと、ある考えが浮かんだ。それは、がんの自然療法、自然退縮についてだった。

つい2週間ほど前の事だ。東京の寺山心一翁先生から電話を頂いた。先生の著書「がんが消えた～ある自然治癒の記録～」を注文させて頂いた事へのお礼の電話だった。先生には、2007年にまほろばでも講演をして頂いた事がある。

がんが消える体験

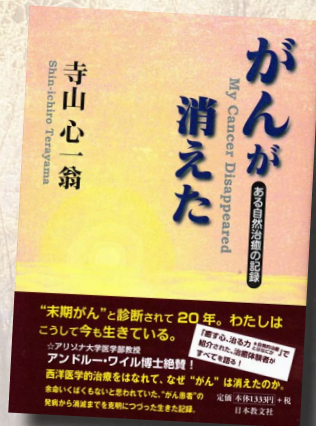
寺山先生の体験は鮮烈である。37歳のときに東芝を退職し1980年「寺山コンサルタンツオフィス」を設立。仕事が多忙を極めていた1984年に右腎臓がんとなった。手術、抗がん剤、放射線による治療を続けたが、肺など他部位へ転移して、がん末期の状態になり、ついには医師からも見放されてしまった。しかし、死を覚悟して戻った自宅で、大きな転機が訪れる。それは、「がんは自分が作った子供のようなもの」との気づきだった。そう思うやすぐに、そのがんの患部に「愛しているよ」と声をかけたのだ。すると、それまでのしくしくした痛みが急に消えてなくなったという。そうやってがんに愛を送ることと、副作用の少ない自然療法を試み、やがてがんは静かに消えていったのだ。



がんを愛する

先生は言う。

「愛を送ることが自然治癒力を高め、そして、癒すことができたのです。この体験を通



して、私は宇宙的な愛の力に気づきました。意識が高まるとすべてがうまくいくという思いが、今の私の仕事の源泉なのです。」（寺山心一翁オフィス HP より <http://www.shin-terayama.jp/>）

がんを愛し、自らを愛する事。恐れを手放し、自分らしく生きること。自然な生き方と食事、自然と共にある暮らし…。それらが免疫を高め、やがて奇跡的な治癒につながったのだろう。

価値観が変わった

そんな簡単な事なら、どうしてみんな良くならないのか…。そう思われるのももっともだ。しかしながら、奇跡的に生還された方が多くいらっしゃるのも事実なのだ。まほろばのお客様にも何人もいらっしゃる。皆さん声をそろえて言われることがある。以前とはすっかり考え方が変わったと。そして、がんになったお陰で、家族の大切さや人生の貴さなど、多くの事に気づく事ができたと…。

治癒への鍵は「意識」

寺山先生もおっしゃるように、カギは「意識」にあるのかもしれない。

偶然だと思うが、翌朝の朝礼で、社長がこう話し出した。

「人に意識があるように、物にも意識がある。そしてすべて世界は、自己の意識が生み出している。インドのアニータさんの例があるように、末期のがんで臨死体験し、「病気もすべて自分が作り出していた。すべてはひとつにつながっていた」という光明を得て、奇跡的治癒に至った例もある。

仏教の唯識学で数千年前から言われていたことが、今、最新の量子力学という現代科学で証

明されようとしている。

人も機械も皆一緒に、それぞれに意識があるのだ。だから、あらゆるものに、「よし、よし」と愛してあげることが大事だ・・・」
と、そんな話だった。



自分に「よし、よし」

社長からミーティングの締めを求められたので、「では、みんな自分自身に向かって“よし、よし”しましょう」ということにした。他の人たちはどうか知らないが、何ともいえぬ感慨があった。まるでやわらかな光の電流が身体を走り抜けたようだった。それは、誰か他人から「よし、よし」される以上の深く満たされた感じと言ってよい。どうしてだろう。

自分を愛せなくなった理由

考えてみれば、これまでの人生で、どれほど私達は親や教師、周りの大人たちからダメ出しされ続けてきたのだろう。社会に適応するようにとの配慮だろうが、それが私達を知らず知らず傷つけ、いつしか自分で自分にダメ出しさえするようになってしまった。そのトラウマは、胸の奥深くにしまい込まれ、毎日の忙しさの中で、その事にさえ気づけないでいるのだ。

だから、そんな自分が、自分に対し「よし、よし」とした時に、何ともいえない安らぎがもたらされたのかもしれない。それが、寺山先生の言う、自分に愛を送るという事ではないだろうか。

さらなる気づき

さらに、社長の話から、もう一つ気づきがあった。

究極のところ、もし、私たちが、“私たちの見る世界”そのものを創造しているのだという唯識学の通りだとするならば、そして、私たちが、その意識の地点に立つことができるならば、たった一人の力でさえも、世界に変革をもたらすことができるといえまいか。

それがたとえ、どんなにちっぽけな変革だとしても、すべてが一つにつながっているのならば、やがて全体に波及する可能性だってあるのだ。

私達が自分自身を愛しはじめること。そして、自分の見る世界、関わる事物を愛すること。

敵と見えるものの中に自らを見出し、その自分に愛を送ること。そして自らの人生を愛し、明るい希望と共に生きること。

今回の問題を根本から解決する「シナリオB」は、そんなところから始まるのかもしれない。

(写真・文 / まほろば編集部 島田 浩)

